

報 龍屋新聞

痴報 龍屋新聞社

鴨川市代六二三 郵便番号 二九九一三八

五四

電話 〇四七〇九二九九

これが最後か、カゴ屋の展示会

「さあさあ、お出でなさい。この世の見納めだよ。」

場所は、江戸は西の外れ、旧世田谷村の羽根木部落。明治の終わりに坂口安吾が代用教員として赴任した学校は下北沢にあった。当時は電車がやつと新宿から下北沢まで開通したばかりであったから、その地よりも西に位置する当地は、寒村そのものであった。それから一世紀が過ぎ、今では東京―小田原鉄道が集落のど真ん中を突っ走っている。駅停の名前は梅ヶ丘。鉄道会社の名前も改められて、小田急電鉄となっている。新宿から一五分のところであり、駅前には商店がごちゃごちゃと並んでいる。大型スーパーやらホームセンターだ進出する余地がないから、街にけばけばしさが無い。通行人の歩行も何かに煽られている気配が少ない。

業界クッンの情報紙
第22号 2008年9月30日発行

「かご屋の暮らし」展特集

肝心の展示会の話である。展示物は竹カゴだけ。他はない。展示だけではなく、初日はウクレレ・コンサートがある。三人（エリ、カツ、ノリ）のウクレレユニットによる。会期終盤にはカゴ編み教室も開かれる。三日間行われるが、各回とも午後一時から。手提げカゴを持ち帰っていただく。会場では荒川健一氏の撮ったスライド・フィルムが写し出される。カゴやが諸所で仕事をしている様や、竹林の佇まいが撮られている。

それと、『風土記』から社主の著作集第一巻が刊行されたので、その展示販売も兼ねている。本のタイトルは『地図から落ちた島へ』である。社主の若いころの遍歴の一部が書かれている。具体的には、二二歳で全てを放り出して歩き出した以降の、二八歳までの記録である。安住の地を求めて西や東に徒歩で訪ねるが、どこにも落ち着いて留まることができない。そんな最中に遭遇したのが鹿児島県下の小さな島であった。猪突猛進の気味のある社主は、あと先のことは何も頭に入らずに、島に住み込ん

で島の模範青年になることを、ひたすら夢みるのであった。そこでは野娘を追いかけられることもできると信じて疑わない。ところが、その臥蛇島という島が無人島になることが決まってしまった。地図から消える運命に抗う拳にはでなかつたが、忘却の彼方にその島を葬り去ることを拒否した。臥蛇島歴代の総代が記録した大福帳の復刻を手がけ、その後もガリ版での私費刊行を続ける。生涯を引きずり回される泥沼の一步が始まったのである。

二八歳後半以降、三三歳までの記録は第二巻の『シマンチュ（島人）と呼ばれて男』に収められることになっている。刊行予定は出版費が用意さればすぐにとりかかるところになっている。ひとえに、第一巻の売れ行きしだいである。（この脅しに乗っていたきたい、と版元は低姿勢である）。

なお、この本は『青春彷徨』（福音館 一九九一年）の新装改訂版である。限定三五〇部で、今回は芳山明氏のデザインした布で装丁されている。（お申し込みは風土記へ）

会期中に写し出されるスライド写真を撮るために、ロケハンが行われた。九月二四日から二六日にかけて、神奈川県と山梨県の県境に近い、旧津久井町（現、相模原市）の山里で撮影された。カメラマンの荒川氏と社主が出かけたのだが、現地での案内は山崎史朗氏（水眠亭主人）が引き受けてくれた。神社裏の草地や、道志川の河原、あるいは、民家の軒先、水眠亭のベランダが撮影地として選ばれた。

夜は言わずと知れた宴会続き。初日には懐かしい友人に会う幸運に恵まれて。水眠亭から車で一五分離れてところに住んでい

津久井ロケ 水眠亭の全面協力で成功裏に

るその友人の名はサンキストという。連れ合いはオミツである。皆が二〇代であったころ、鹿児島市内で一時同じ屋根の下で寝食を共にしたことがある。市内下荒田で一軒家を五人が協同で借りていた。五DKの民家を二万一千円で借りていた。家の前前は臥蛇荘といい、住人は学生や大学教員、あるいはトカラの島々に入入りする旅人などで、いつも多くの人が出入りしていた。↓

水俣病を告発する会「鹿児島支部」の看板も掲げていた。自称カクメイカもいて、公安刑事の目が釘付けになっていた。その後、近くに女たちの館も設けられて、鬼百合荘の名が通り名となった。

サンキストはトカラの諏訪之瀬島からの帰りにこの鬼百合荘しばらく滞在していた。そのときに住人の女たちが留守だったのか、あるいは、ハーレムを楽しんでいたのか、誰も分からない。食事の時は臥蛇荘に来て皆と会食したように記憶するが、確かではない。社主が島（トカラの平島）を離れて、北関東の笠間の山中に移ってからも、サン

キストとオミツは訪ねて来てくれた。

それから幾星霜、変わらないのがサンキストである。スタンスが変わらない生き方ほど自己制御にエネルギーを注ぐものはない。

荒川カメラマンと水眠亭主人のはからいで、社主はしたたか酔いしれた。

社告 「月イチとから塾」の開講

来年の話をするとう鬼が笑うから止めよう、と言えるのは手持ち時間に余裕のある人の言。明日にもくたばろうという社主には、「笑わば笑え」の村田英雄節しかない。講座の内容は

『平島語辞典』（未刊）の項目の解説である。どれもが、社主が平島での暮らしのなかで体得した項目である。

第一回目は「大根二本と伊勢エビ」である。概略は、社主が闇夜の晩に集落を抜けて出でて、島裏にエビや鯛を煮溜りて突きにでかけた。夜間は魚類の動きが鈍くなっているから、魚突きの下手くそな社主の相手をしてくれる。海拔二〇〇メートルの峠を越えて四〇分を掛けて島裏のヒガシのハマにたどり着く。夜が明ける直前までが漁時である。

大漁の夜の帰り道は難行である。背負いカゴに入れて海の幸の他に、ウエットスーツとそれの鉛のベルトが肩に食いこむ。それでも、かみさんと子どもにあてがう食糧だと思つと、狩猟本能を充たしてくれるばかりではなく、養い主なんだという、こそばゆい気持ちがあたまらない。もつと單刀直

李蕪 (イ・フン) 著 『朝鮮後期漂流民と日朝關係』(池内敏訳) 法政大学出版局 二〇〇八年

なぜにこの書物をここで取り上げなければならぬかを、簡単に説明しておく。

社主は二〇代の後半に鹿児島県下の離島に住んでいた。その島の名前は臥蛇島というが、そこに朝鮮半島の船が流れ着いた。一四五〇年のことである。その事実が朝鮮の国史である『李朝実録』に記載されている。

六人が乗りこんだ船が暴風に遭い、臥蛇島に漂着した。ふたりはその後病死し、残る四人のうち、萬年と丁録とのふたりが琉球経由で母国に送還された。残るふたりは薩摩へ送られる。

臥蛇島を含むトカラの島々は朝鮮半島とも距離が近く、その後も多くの漂着民が島々に漂着した伝聞が遺っているが、送還されたという公式記録は少ない。臥蛇島の東隣の中之島には白木姓があるが、これは島では最も古い家系のひとつと言われている。現在の集落は島の西海岸にあるが、古

近ごろ巷ではやっついている謎み物。



くは東側にあつた。その証拠は島の大切な祭事のひとつである霜月祭りの始まりは東の神々を祭ることから始まる。神さまのひとはシラキの地にある。そこには古い墓所もあり、縄文期の土器も出土している。

白木姓はその出である。シラキのその祖はシラギ・新羅であるといわれている。半島から渡ってきた人たちなのだろうか。

そうした半島との交流が古い時代から行われていた。島々が島津にも琉球にも帰属しない時代もあつたのだろう。

そうした時代への傾斜が、わたしの中で少しずつ培われていった。いま、この書をひもどくに先だつて、(もしかしら、臥蛇島に漂着した民の記録が載つてはしないだろうか、という期待があつた。

縄文 異説
A-1016
島津氏

入に言ううと、男を自覚させてくれる。

岩だらけの二〇〇メートル山道を登り、帰宅するころには空が薄明るくなってくる。わたしは、悪いことでもするように、音を消すようにしてまな板を叩いて、魚を捌く。

冷蔵庫がないから、というか、電気がないから、少しでも早く塩漬けにするか、火を通すように心掛けている。大きなコブダイを切り身をするために、ナタを振り下ろして背骨を切断した。まな板が響かせた音は

隣近所に届いたことだろうか。心配しても始まらない。こんな早朝に起きている人もいないだろうと、たかをくぐる。社主は次々に魚を捌いていった。そうしたら、あろうことか、隣りとの境を成している竹藪の向

こうから、大根が二本放り投げられたのである。社主は全てを悟つた。この薄闇のなかで息を殺すようにして魚捌きをしたことも、それより前に、足音を立てない用心をしながら棘に向かって歩き出したことも、無駄だったことを知らされたのである。

この大根が何を意味するか、魚の分け前をよこせというサインではあるが、そてを断ればどういふ仕打ちが待っているか、逆に、要求に応じたならば、次にはどんな事態が待っているか、そんな話から始める予定である。それは贈与でもないし、物々交

歴史上の事を究めるのはこういうことかと改めて教えられる書であった。著者の一貫した姿勢は、「一次資料から離れない」ということである。文字を駆使して人に伝える作業は、どの分野のものであれ、著者の私感が表れる。あたりまえのことである。ただ、その私感の表れ方が問題になる。

資料を丹念に読み解くほど、私感をたやすく吐ける隙がなくなる。それだから、解説作業が丹念であればあるほど、読者は事象の深部に引き込まれていっても、いまだ著者の私語が聞こえてこない。この日韓関係史の仕事に今後多くの人がかかわっていくことだろうが、後続のしびにとつて、この書の著者が、ありがたい先導者であると同時に、しんどい地点にまで掘り下げてくれたものだ、という悲鳴も聞こえてきそうだ。その深部まで自分も入って行かなければ、先に進めないからである。

むろん、李薫氏の仕事も、永年にわたり先達が築いた土台があって、初めて可能なことではあったが、この書も、また、日朝関係史を究めるための、新たな礎となることは間違いない。

著者が日本語版の序文に書いているように、これまでの韓日関係史の研究対象は、

「韓日外交」、「対外関係」、「韓日関係」という題目からも分かるように、交流の主体は中央政府、あるいは国家とみて研究したものが多かった。著者は、「対馬宗家文書」の整理を通して、辺境の住民間に、「漂流」という海難事故を介して中央政府をはるかに越える交流と接触が日常的に存在するということも分かった、と延べている。交流の主体を中央政府から「漂流民」に置き換えて、両国の交流実体を検討しなおそう、という。

日本ではかなり以前から、国家の枠を外した交流の実態が研究対象になってきた。戦後になってからは、田中健夫、村井章介の先達があり、後にいたつては、池内敏、高橋公明などがいる。交流がマージナルなものであり、国家間の接触以前に、沿岸住民間の交流・接触があつたことを丹念に拾いあげている。特に前近代では、両国の鎖国策が民間交流を禁止していたから、漂流は、異文化に接触できる数少ない機会であつた。

なぜ漂流という事件が起こつたのかも、大きな問題であるとしてらえている。不慮の海難事故が圧倒的に多いのだが、中には意図して漂流した可能性もある。そうした場合に、漂流民の身分の多くが奴婢だつたこととも重ねて考える必要を説いている。対

換から始まる交易・取引でもない。島ならではのカセイ(加勢)へと、話は進んでいく。

開講日 二〇〇九年三月第一火曜日

場所 東京都中央区日本橋浜町二の二二の三 ヒナタノート

受講料 無料。ただし、定員十五名

馬藩では多くの水主を雇い、担当吏(漂差倭)が漂流民を本国に送り届けている。一六世紀末から明治維新までの二九〇年に間に一万人を越える漂流があつた。

対馬藩は、その見返りが、引率者の員数や、一行の朝鮮滞在日数に応じて雑物や米が支給されたから、食糧事情の悪い対馬藩は、少しでも多くを貰おうと画策した。半島の南端に位置する倭館へは頻りに藩の船が往來していたのだが、渡海船が釜山浦の近くのどこかに不意に至つた場合でも、それを漂着だと主張して雑物を受け取ろうとした。藩が年例送使を派遣して得る雑物の量が、毎年四〇〇〇石に達したが、これは藩の輸入米(公作米)の四分の一に相当する。

そうした送還体制を含めて、「漂流」という一語から、両国の政治体制までも解明しようとの意図が伺える労作である。